
LOVE , 9 1

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LOVE -91

【NZコード】

N4037F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

一九九一年、まだバブルだった頃。その頃に出会った君との思い出。チエツカーズシリーズ第三十五弾、後期のゆつたりとした曲です。

第一章

LOVE - 91

ずっと昔の話。まだバブルとかそんなことを言っていた頃。巖原のヤクルトが阪神を何とか破つて優勝して野村さんが宙に舞つた年。結構色々あつたけれど一番憶えているのは君と出会つたことなんだ。

あの時君に出会つたのは木漏れ日のテラスだつた。君にはじめて出会つてすぐに見惚れた。飲みかけのカプチーノをそのままにして君に見惚れたんだ。

思わず声をかけたらそれに応えてくれた。まるで夢みたいだつた。「何かしら」

「あっ、いや」

何て言えばいいかわからなかつた。ただ無意識のつむに声をかけただけでそこまで考えていなかつた。それでも君に声をかけたのがはじまりだつた。

「あの、ちょっと」

「ナンパ？」

わかつていたから笑顔で応えてくれたのはわかつてゐる。今も。

「面白いわね。乗つたわ」

「乗つたの？」

「ええ。丁度タイプだしね」

水色の服に艶やかな笑顔が映えていた。水色の君はあの昔のアメリカ映画に出て来る美人みたいだつた。水色のマリリン＝モンローだつた。ふわふわした軽い服が丁度そんな感じだつた。金髪じやんかつたけれどモンローは本当は黒髪だつたらしいからそれでいいとも思つた。

「乗るわ」

言いながら僕の席のところに来て座つた。ウェイトレスに声をか

けてから。

「それにね」

「そう。じゃあ」

「一緒にを御願い」

「僕の飲みかけの力プチーノを見て言つてきた。

「力プチーノをね」

「それでいいんだ」

「ええ。ただ」

君はここでまた僕に言つてきた。

「今はナンパでいいけれど次はしっかりとしたのがいいわ」

「デートつてこと?」

「ええ、そうよ」

にこりと笑つて頷いてくれた。

「デートがしたいんだけれど」

「今からじや駄目かな」

「今はナンパじゃない」

いつも言つて断つてきた。今の僕の誘いは。

「今度ね。電話番号渡すわ」

「そりやどうも」

この時はまだ携帯電話なんものはなかつた。思えば本当に昔だ。あの時は随分ハイテクな中に暮らしていると思つていたけれど今程じやなかつた。もつとも十五年も経てばその時も同じことを思つんだろうけれど。

「じゃあそういうことで。その時にね」

「うん。その時に」

これで話が決まつた。電話番号は本物だつた。どうやらマジで好かれたらしい。それにまずは喜んでから彼女と話して日時とか待ち合わせ場所に行く場所を決めて。それでその日に待ち合わせ場所の銅像の前に行くと向かい側の歩道から小さく手を振つて僕のところにやって来た。やっぱり服はあの水色のふわふわとしたワンピース

だつた。あの時と一緒に格好だつた。

「待つた？」

「ううん」

この時のやり取りはデートのやり取りの定番だつた。

「今来たところさ」

「そう、よかつた」

君は僕の今の言葉を聞いて笑顔を浮かべてくれた。

「それならね」

「じゃあ行くか」

「ええ」

待ち合わせ場所に来た君といつしょに向かったのは吹き抜けのギヤラリーだつた。人影はまばらで僕達は静かなデートを楽しんだ。

第一章

その中で君は一枚のウォーホールの前で立ち止まつた。僕はそれを見て見惚れていた。

「いいわね、これ」

「そうかな」

この時僕は狙つていた。今だから言えるけれど。

「別にそつは思わないけれど」

「そう? ここにあるので一番いいと思つけれど」

「精々一番だね」

僕はこう答えた。

「どう見ても」

「じゃあ一番はどれなの?」

「田の前にいるよ」

「田の前に・・・・・いる?」

君が僕のその言葉にキヨトンとしたのと丁度そこに誰もいなかつたのがラッキーだった。念の為に素早く辺りを見回してから君に顔を近付けて。すぐにキスをした。見逃さなかつた。

「えつ・・・・・」

「やつたね」

驚く君の目にウインクした。これで決まった。

「これでね。君と一緒にれるね」

「参つたわね」

唇を左手で押さえて真っ赤な顔で呟いたのは今でも覚えているよ。

「こんなふうにされるなんて」

「駄目だったの?」

「いいえ」

僕の言葉に首を横に振つてくれた。いい意味で。

「いいわ。けれど」

「けれど？」

「今度は私の番よ。次の『テート』の時にはね」「どうするの？」

君の思わずぶりな笑みを見てまた君に尋ねたね。

「それで」

「その時にね。わかるわ」

「そうなんだ」

それで今度の『テート』が決まった。場所は所沢の西武球場。外野の応援席は奇麗なグリーングラスだった。そよ風がさして試合が見られる。あの頃西武は憎たらしい程強かった。これも本当に昔の話になつたけれど。

僕は最初試合を見ていたけれど何時の間にかうどうとしていた。今思うと君はこの時を狙っていたんだってわかる。僕がうどうとするその時を。

気付くと僕が最初に見たのは水色の宇宙。一面の空だった。

「寝ていたんだ」

「そうよ」

君の声が聞こえてきたのを今でも憶えているよ。

「氣落ちよさそうね」

「座つていたと思つけれど」

「最初はね」

また君の声が聞こえてきた。ここでその声が上からなのがわかつたんだ。

「そうだつたけれど」

「そうだつたんだ。それに何か」

やつと氣付いた。頭の後ろに感じる柔らかい感触に。柔らかいだけじゃなくて暖かつた。温もりを感じていたんだ。

「暖かい。どうして」

「知りたい？」

僕に尋ねてきたその時。君の声は笑っていたね。

「それがどうしてか

「うん」

そして僕は、君のその申し出に頷いた。どうしてもそれを知りたくて。

「どうしてなの。それは」

「これよ」

「これ？」

僕が何かわからないでいたその一瞬の間に君の顔が上から出て来てそれで僕にキスをした。あの時とは完全に逆だった。

「こうこうことなのよ

唇を離した君が微笑んでいた。僕の顔を覗き込んで。これでやつとわかった。僕も。

「そういうことだったんだ

「そうだったのよ

「膝枕」

それを呟いた。

「君の膝枕だつたんだ」

「嫌かしら

「つうん」

微笑んでその言葉に首を横に振ったね。憶えているよね。

「こんなことしてくれるとは思わなかつたけれど。それでも

「嬉しい？」

「嬉しくなかつたらや」

また言つたの。憶えているかな。

「すぐに頭を起こしてくるよ

「そうよね

「あつ、飛行機」

天使みたいな笑顔の彼女の上に飛行機雲が見えた。けれどそれは一瞬だけ見て僕が見るのはやっぱり。君だけだった。

「これからさ」

「これから？」

「何時までもこうしてみたいよ」

これがプロポーズの言葉で。一人の時間が永遠に一緒になることのはじまりだった。

「それで。いいかな」

「…………ええ」

にこりと笑つた君の笑顔は今でもカラーのままでセピア色になんかならない。あれからもう随分経つて君と結婚してかなり経つけれどそれでも。

君の笑顔はあの時と変わらない優しいまま。その笑顔を見て今日も過ごすよ。君だけを見て。

LOVE -91 完

2008・4・5

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4037f/>

LOVE , 91

2010年10月8日15時58分発行